Ⅳ 遺　　物

遺物は，主に朱雀大路西側溝やその延長部の堆積土や遺構面を覆う暗褐色粘質土中より出土した。新しい遺物は，表土下約１mの青灰色粘土層から宋銭・明銭・瓦質の骨蔵器等の中世・近世の遺物が出土した。

1.　土　器 (PL.13-4・5，14-1，Fig.13)

土器は朱雀大路西側溝から主として出土した。そのほかは断片であるので，ここでは朱雀大路側溝出土のものを紹介する。土師器30点，須恵器５点，黒色土器５点，瓦質土器４点である。

土師器　杯・椀・皿・甕・鉢形土器などがある。

杯（１）　口径は約16.1cmである。広い底部と浅い口縁部をもつものである。口縁部は外傾しながら，端部でわずかに外反する。端部内面は肥厚している。内外面ともに横ナデする。底部内面は螺施状の暗文，側面には細かい放射状の暗文がある。緻密な粘土を用い，焼成も良好である。色調は茶褐色である。

椀（５）　口径は約12.3cmである。底部は欠損しているが，平底とみられる。口縁部は内彎ぎみに開き，端部がまっすぐに立ち上がるものである。口縁上端は内傾している。口縁端部外面は横ナデしているが，それより下は成形の際の指圧痕が残り，未調整である。粘土紐の痕跡も観察できる。胎土には砂粒を含むが，焼成は良好である。色調は茶褐色である。

皿（３）　口径は約12.5cmである。口縁部は外方に開き，端部でわずかに外反する。内・外面ともに横ナデで仕上げている。

鉢（７・９・11・13）　⑾は口径は約15.5cmである。短く外反した口縁部と胴の張らない体部からなっている。底部は欠損しているが丸底気味の平底であろう。口縁部外面のみ，横ナデしている。体部外面には幅約4.5cmの粘土紐の痕跡が残り，継目に親指大の粘土を貼りつけている。胎土は砂を含む。やや軟質で，色調は茶褐色である。

⒀は口径は約16.7cmである。鉢⑼と同様の形態である。異なる点は，鉢⑾の口縁端部が薄く仕上げているのに対し，口縁端はまるくおわっている。口縁部内・外面のみ，横ナデしている。胎土に砂粒を含むが，焼成は良好である。色調は赤褐色である。

⑺は体部上半は欠損しているが，鉢⑾⒀と同様，短く外反する口縁部をもつ形態である。底部外面は，成形時の指押痕が残り凹凸している。体部内面下半は横方向の刷毛目で調整し，そのあと底部を篦削りしている。体部外面には，対称の位置に人面が墨描きされている。いずれも髭をもった男である。なお，復原にあたって，大阪府八尾市本町発見の人面土器を参照した。胎土は砂粒を含む。焼成は良好で，色調は茶褐色である。

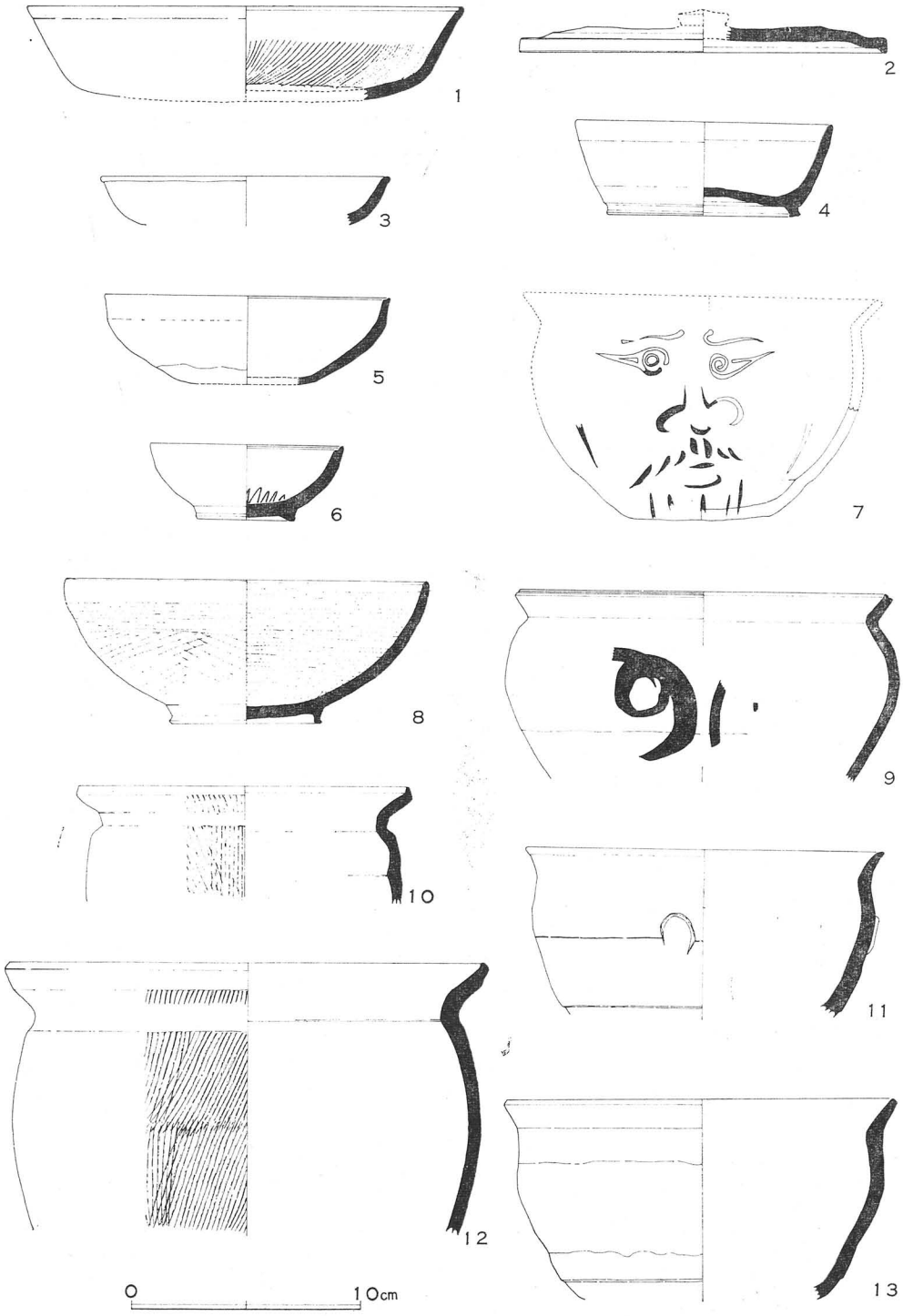


Fig. 13　出土土器実測図

⑼は口径は約15.8cmである。口縁上端は凹面を呈し外傾する。口縁部内・外面は横ナデで仕上げる。体部外面には左右に渦巻状の墨描きがあるが，破片のため全形は明らかでない。胎土は砂を含む。やや軟質で，色調は茶褐色である。

甕（10・12）⑿は口径は約20.4cmである。短く外反する口縁部と胴の張りの少ない体部をもつものである。底部は欠損しているが，丸底であろう。口縁部及び体部外面は，刷毛目で調整し，頸部のみ横ナデで消している。胎土は砂粒を含む。やや軟質で，色調は茶褐色である。

⑽は口径は約14.2cmである。口縁部は短く外反する。口縁端部は内傾している。口縁部・体部外面ともに縦方向の刷毛目で調整し，頸部は横ナデしている。内面は横ナデで仕上げている。外面全体に煤が付着している。胎土は多量の砂粒を含む。硬質で，色調は赤褐色である。

須恵器　器種には，杯・蓋・長頸壷・甕・鉢・高杯などがある。

杯（4）　口径は約11cm，高さ4.1cmである。内彎ぎみに外傾する口縁部と低い高台をもつものである。口縁部内外面ともにロクロで横ナデし，底部はナデツケで仕上げている。底部外面には篦切痕をとどめている。胎土は良質で，焼成も良好である。色調は暗灰色である。

蓋（2）　口径は約12.9cmである。口径に比べて，高さが低く扁平である。口縁部は短く屈曲し，端部断面は三角形をなす。つまみは欠損している。外面中央部は篦切り痕の上を粗く横ナデしているが，周縁部は丁寧にロクロで横ナデする。内面は中央部をナデツケし，周縁部を横ナデで仕上げている。胎土は少量の砂を含む。焼成は良好で暗灰色である。

瓦質土器

椀（6・8）⑹は口径は約8.3cm，高さ3.2cmである。内彎ぎみに開く口縁部と断面三角形の高台をもつ小型の土器である。口縁端部内面に沈線が一条めぐる。口縁部外面は横ナデする。口縁部内縁は横ナデし，底部内面には一定方向に篦磨きする。⑻は口径は15.7cm，高さ6.3cmである。内彎ぎみに開く口縁部と断面梯形の高台をもつものである。口縁部外面は横方向に篦磨きし，とくに口縁部は丁寧に調整している。口縁部内面は横方向にこまかく篦磨きし，底部内面に，一定方向に粗く篦磨している。内外面ともに黒灰色で，にぶい光沢をもっている。胎土は砂粒を含み中は灰白色である。焼成からすれば，瓦器ともみられるが，普通，瓦器は精製された粘土を用いるので，この土器を瓦器にするか，黒色土器にするか，なお，検討を要する。そのほか，「東」と墨書した須恵器杯片がある。

土師器・須恵器の多くは，奈良時代後半のものと考えられる。瓦質土器は平安時代のものである。土師器のうち注目されるのは鉢形土器である。14個体出土しているが，一様の形態をもち，成形・調整ともに類似点がある。この種の土器にかぎり，人面が墨描きされており，祭祀用に特別に製作され，用いられた可能性がある。

2. 土製品

土馬（Fig. 14） 頭部と尾部が欠損している。体部は粘土板を折り曲げて作っている。したがって，横断面は逆V字形をなす。鞍や手綱はない。奈良時代中頃のものと思われる。

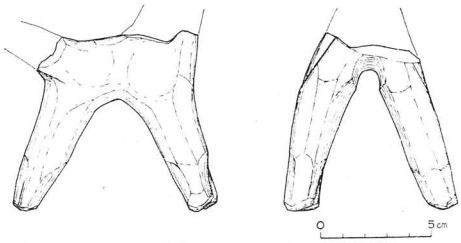


Fig. 14 土馬

土管（Fig. 15） 全長24. 4cm，径11cmである。円筒形をなし，一方の端がふくらみ接合部を作り出している。径は13. 3cm となる。約3. 5cmの粘土紐の巻きあげによって作られている。内面の粘土紐の継ぎ痕跡から，接続部が最後に作り出されたことがわかる。外面は凹凸がある。両端部は横ナデ，体部は縦方向のナデツケで調整されている。内面は横ナデである。瓦質のもので，胎土には多量の砂を含み，灰色を呈す。この土管は，第二次調査Bトレンチから，5本以上連なって発見された。出土層位からみて，中世以降のものと思われる。

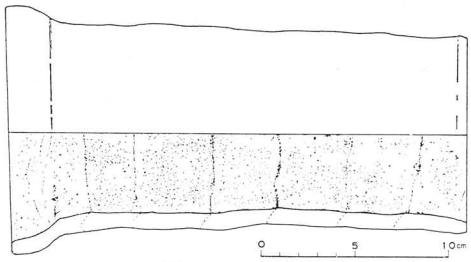


Fig. 15 土管

3. 金属製品

帯金具（PL. 14-1，Fig. 16） 鉄製。長さ3cm，幅2. 5cm である。帯先につける鉈尾で，裏面には留釘3本を鋳出する。

釘（PL. 14-2） 銅製。長さ7cm である。横断面は四角形で，頭部は折り曲げたもので扁平である。

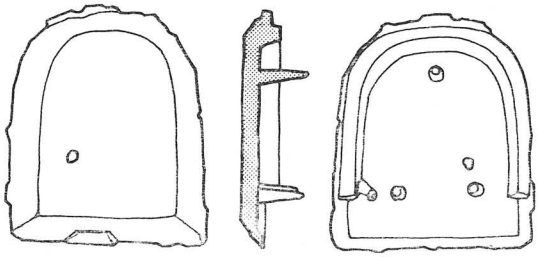


Fig. 16 帯金具（実大）

銭貨（PL. 15） 和同開珎13枚，朱雀大路西側溝，同延長部，九条大路北側溝から出土している。その他宋銭・金銭・明銭などがある。

宋銭…淳化元宝（990） 祥符通宝（1008） 至和元宝（1054） 嘉凞通宝（1056） 凞寧元宝（1068） 元符通宝（1098） 大観通宝（1107） 政和通宝（1111） 金銭…正隆元宝（1156）1枚， 明銭…永楽通宝（1408）が3枚ある。

4. 木製品

曲物底板・曲物側板・漆器椀片・桶・榧・木簡などがある。榧・木簡以外はいずれも近世の遺物を含む土層中から出土した。木簡は1点あるが判読できない。

曲物 曲物側板には，器の径をあらかじめ印したと考えられる墨痕が残っており注意を引いた。この側板は，樺皮や底板を失っているうえ，埋没時に変形を受けているが，ほぼ全体を留め，原形を推定することはできる。檜の柾目材の薄板から作り，径13cm，現存高8.5cm，木釘穴は4個所ある。重ね合わせ部分は5.1cmあり，墨痕は，内側に入る側板の上面，側板端から5.1cmの位置にある。この位置に，外側に出る側板の木口を合せる。これは，要求された径の曲物が作り易いよう，側板を曲げる作業工程以前にあらかじめ側板数枚を重ねて一括印をつけたものであろう。このような墨痕は，通常仕上げ時や使用時に失なわれるものであるが，この例の如く残り，製作工程の一端を示す資料は少ない。

榧 (PL.16, Fig.17) 第二次発掘Aトレンチの朱雀大路に面する築地の内側の下層遺構面より出土したもので，全長263cm，中央部断面6.4cm×8.0cmありほぼ完形を保っている。

材種は檜で，表面はちょうなばつりの上やりがんなをかけたらしく，いたって平滑に仕上げられている。材の一端は棟の拝み部分にあたり，幅の約3分の1を造り出して枘とし，枘の中央に，対になる榧と固定するための栓穴がある。他端は木口鼻で，その切断面は木柄に直角ではなく下面からみてやや鋭角になっている。上面には木口から75cm後方に小舞をとめるための「えつり」の仕口があり，下面にはこれより10cm前方に桁のあたりとみられる一部分風蝕していないところがある。また木口部分には茅負を留める釘によっておきた割れが入っている。

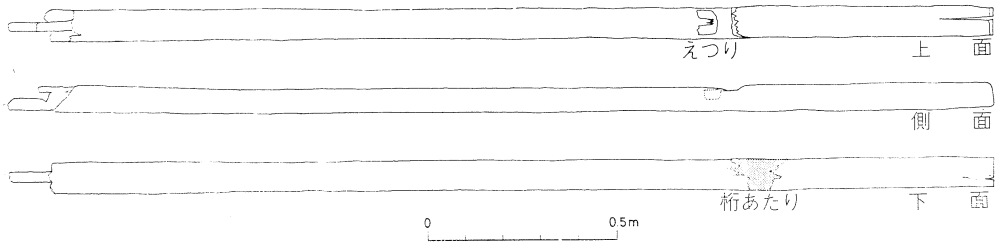


Fig.17 出土榧

このようにしてあきらかに奈良時代に属する化粧榧の様相を示し，その長さや太さ，桁の位置などから考えて築地に使われていた可能性が強い。その場合は発掘地点からみて朱雀大路に面する築地ということになる（P.32 参照）。

5. 瓦　類

瓦類は，第二次調査においては朱雀大路に面した西側築地跡周辺から，第三次調査においては朱雀大路西側溝から主として出土した。羅城門基壇付近からは，ほとんど発見されなかった。第二次調査では，２時期にわたる築地の，それぞれに伴って上下２層に明確にわかれて出土している。軒瓦は量的に少なく，軒丸瓦が10型式21点，軒平瓦が５型式９点である。二・三両次の瓦類について一括して以下に述べよう。軒瓦の型式番号については，奈良国立文化財研究所で用いている番号によった（註１）（本文中の番号は挿図中の番号をさす）。

軒丸瓦（PL. 11，Fig. 18～20）　１（6012A）は重圏文軒丸瓦である。小片であるが，外縁と圏線との間隔からみて平城宮跡や唐招提寺にみられる6012Aである。２（6133B）は内区に単弁12弁の蓮華文を配している。外区は内縁に広い間隔で珠文をめぐらせるが，外縁は素文である。瓦当面は全体的に平坦である。瓦当裏面の丸瓦との接合部には，接合用の粘土を押圧した際の，指頭による凹凸が顕著に認められる。類例は平城宮跡，西大寺，檜隈寺跡などで知られている。３（6284C）は，内区に界線でかこんだ複弁８弁蓮華文を配し，外区内縁に珠文，外縁に線鋸歯文をめぐらしている。１＋６の蓮子をおいた中房は，弁区とほぼ同一面上におかれ，蓮弁の反転もほとんどないために，全体に平坦な瓦当面になっている。瓦当裏面は横方向に調整している。瓦当裏面に丸瓦を接合する際にあてた粘土は，へらで円弧状に調整している。類例は平城宮跡，大安寺，額安寺などで発見されている。４（6285）は３と同様な瓦当文様をもつ軒丸瓦であるが，蓮弁はやや強く反転しており，弁区全体を外区内縁より一段高く作っている。中房は弁区より低くおかれている。瓦当面には，笵型木目の痕跡が横方向にあらわれている。類例は平城宮跡，恭仁宮跡，法隆寺，秋篠寺などで発見されている。６（6304L）は３・４と同様の文様構成をもつ大形の軒丸瓦である。瓦当直径は約30cmに復原できる。１＋６の蓮子をおく中房はやや凸出し，蓮弁はわずかに反転する。こうした大形の軒丸瓦は，他の型式のなかにも見受けられるが，量的に少ないことから特殊な用途，たとえば鬼瓦と同じように棟瓦として用いられた可能性が考えられる。類例は平城宮跡から出土している。５（6308Bb）は複弁８弁蓮華文で，蓮弁の反転度はかなり強く，各弁の間には間弁を配している。１＋６の蓮子をおいた中房はやや凸出している。瓦当は厚く作っており5.1cmある。瓦当側面には「北」の刻印が見られるが，平城宮跡出土のものの中にも多くこの刻印がみられる。なお，瓦当面には，笵型のひび割れを示す隆起線がみられる。７・８・９（6316）は，いずれも内区の主文として間弁のない隣接した複弁蓮華文を配しており，外縁は高く直立している。これらは，蓮子の数，中房の高まりなどがそれぞれ異なっているが，同一型式での微細な変化である。７（6316I）は直立縁で外縁の立ちあがりは0.9cmある。１＋４の蓮子をもつ中房は凹である。丸瓦のとりつけは瓦当裏面の天から４分の１の位置にある。接合部には粘土をあつくあてている。８（6316B）も中房は凹であり，

1＋8の蓮子をおいている。丸瓦の接合部は7よりも若干上位にあり，裏面にあてる粘土は7ほど多くない。9（6316Da）の瓦当直径は7・8よりやや大きい。外縁は前二者と同様に高い直立縁であるが，文様の線が太く中房が突出しているために，さほど高い感じを与えない。丸瓦の接合部は，瓦当裏面の中位ちかくにあり，粘土をあつくあてている。7・8・9の類例は，平城宮跡，常陸，下野，甲斐，播磨，備後，讃岐の各国分寺跡（註2），播磨（註3）の溝口廃寺，上原田廃寺，小川廃寺，中井廃寺，西条廃寺及び備後（註4）の宮の前廃寺，本郷平廃寺，岡遺跡などに見られる。10（6316Db）は9と同一の瓦当文様であるが，中房においた蓮子が1＋8となっている。これは9の中房においた4点の蓮子の間にそれぞれ1点ずつ彫り加えたものである。こうした類例は元興寺，西隆寺跡（註5）で発見されている。

軒平瓦（PL. 12，Fig. 21）　1（6572）は右端部だけの小片であるが，外縁とともに2重圏線を表わした重郭文軒平瓦である。顎は曲線顎である。類例は平城宮跡，難波宮跡，長岡宮跡，唐招提寺などで発見されている。2（6694）は，上外区から2葉ずつ分岐した中心飾の左右に3回反転の均整唐草文を内区に配し，外区に珠文をめぐらせた瓦当文様をもつものである。顎は段顎である。類例は平城宮跡，唐招提寺，薬師寺などで発見されている。3（6721F）は，三葉形の中心飾の左右に5回反転の均整唐草文を内区に配し，上下外区に小さな珠文を密においている。脇区は素文である。顎は曲線顎である。類例は平城宮跡，海竜王寺，秋篠寺，法隆寺などから発見されている。4（6710Ab）は，山形の中心飾の左右に3回反転の均整唐草文を内区に配し，外区に珠文を疎にめぐらせている。文様構成は平城宮跡出土の6710Aaとよく似ている。6710Aaとは，上下外区珠文帯の間に×文を配さない点が異なり，文様の線もかなり太く丁寧な彫刻ではないが，唐草文と珠文との位置関係からみて，今回出土したこの軒平瓦は6710Aaの笵型を彫り直し，×文を省いたものであることが明らかである。顎は両者ともに曲線顎である。平瓦の凹面は瓦当部ちかくを横方向に調整しているが，ほぼ全面に布目が明瞭に残っている。凸面は叩き目の痕跡がわからないほど，ほぼ全面にわたって丁寧にけずっているが，一部に縄叩目が残っている。瓦当面から7cmの位置に丹が付着している。側縁は葺き上げる際にかなり欠きおとしている。類例は備後（註4）の本郷平廃寺，吉田寺跡，岡遺跡から発見されている。5（6711）は中心飾も明確でなく，唐草文も左右均整に配されてはいないが，均整唐草文を意図して作られたものである。顎は曲線顎である。平瓦部の凹面は，瓦当寄りの約3分の1の範囲だけ厚くけずり，後部とさかいに明瞭な稜が見られる。凸面は4と同様，丁寧にけずっている。葺き上げる際に凹面の側縁を欠いたものもみられ，いずれの凸面にも瓦当部ちかくに丹が付着している。

道具瓦（PL. 13-2，Fig. 22）　道具瓦としては面戸瓦がある。5点出土しており，幅23.5～25.9cm，高さ13.6～14.1cmのものである。

丸・平瓦（PL. 13-1・3，Fig. 22-2・3）　丸・平瓦は現在なお整理中であるが，第二次調査で発見した上層の瓦について，一部ではあるが整理を行なったのでその要点を述べよう。

丸瓦は灰白色で軟質の焼成のものと，灰黒色で硬質の焼成のものとがある。いずれも平均して全長36cm，幅14.5cm，玉縁長4～5cmである。凸面の縄叩き目は縦方向のケズリによる調整でほとんど消されている。玉縁部凹面の段はさほど明瞭でなく，なだらかである。平瓦も丸瓦と同様に灰白色で軟質なものと灰黒色で硬質のものとがある。全体的に小ぶりで薄手に作られている。全長は平均して34.3cmである。厚さは1.3～1.6cmのあいだに集中する。凸面にはいずれも縦方向の縄叩き目がほぼ全面に残っているが，広端と狭端に接した1～1.5cmの範囲は横方向のケズリが行なわれている。凹面には成形時の布目圧痕が明瞭に残っている。凹面のひと隅に，側辺にそって縁をまつった布の圧痕がみられるものがある。このことは，凹面に桶巻作りによる模骨痕がみられないことをあわせて，いわゆる1枚作り（註6）によったものと考える。

軒丸瓦		1	2	3	4	5	6	7	8	9・10
瓦当直径		(15.8)	16.5	(16)	(16.5)	16.2	(30.0)	13.7	14.4	16.9
瓦当厚		不明	3.6	4.3	4.1	5.3	(5)	3.4	3.9	4.7
内区	中房径		3.9	4	3.3	3.6	不明	3.2	3.4	5.1
	蓮子数		1+6	1+6	1+6	1+6	1+6	1+4	1+8	1+4 1+8
	弁数		T12	F 8	F 8	F 8	F 8	F 8	F 8	F 9
外区	内縁文様	J	S15	S24	(S23)	S16	(S24)	S16	S24	S17
	外縁文様			(LV16)	(LV22)	LV16	不明	LV20	LV27	
全長						(37.7)				
出土個体数	2次	1				1		1	5	1・1
	3次		1	4	1		1			1

軒平瓦		1	2	3	4	5
上弦幅			(23.5)	(28.5)	不明	26.7
下弦幅			(27.5)	(29.5)	不明	25.7
厚			6.0	5.6	5.7	5.2
内区文様		J	KK	KK	KK	KK
上外区文様			S15	S33	S13	S20
下外区文様			S16	S34	S13	S18
脇区文様			S 2		S 2	S 3
全長					35.4	39.7
出土個体数	2次	1	1		1	4
	3次		1	1		

Tab. 1　軒瓦計測値・出土個体数表（型式不明分を除く）

註1．軒瓦解説の各番号の次にカッコ内に記した数字はこの型式番号であり，アルファベットは細分された型式である。なお，平城宮跡出土の同笵瓦については「平城宮発掘調査報告Ⅱ～Ⅳ」（奈良国立文化財研究所学報15～17）を参照されたい。

2．角田文衛編『国分寺の研究』昭和13年8月。

3．鎌谷木三次『播磨上代寺院阯の研究』昭和17年3月。

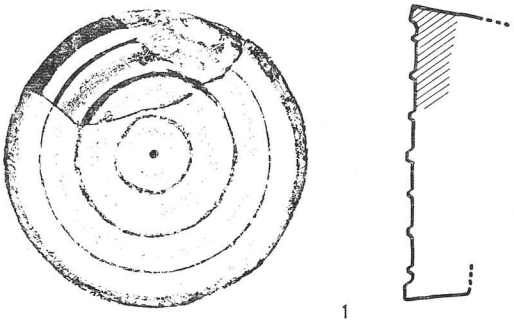
4．広島県教育委員会『備後工業整備特別地域埋蔵文化財調査概報』昭和42年3月。

同『伝吉田寺跡発掘調査概報』昭和43年3月。

広島県岡遺跡発掘調査団『岡遺跡発掘調査報告書』昭和47年3月。同書にあげられた一覧表によれば，なおいくつかの遺跡から発見されている。

5．奈良県教育委員会『西隆寺金堂跡発掘調査概報』昭和47年3月。

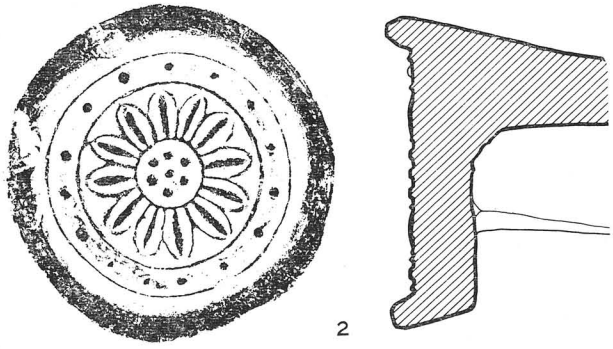
6．佐原真「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌第58巻第2号』，昭和47年9月。



1

1. 重圏文（6012A）

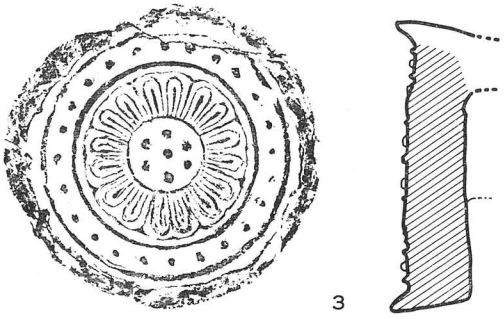
瓦当―復原径15.8cm・厚不明，三重圏文，外縁幅0.8cm・高0.4cm，灰白色，胎土緻密。



2

2. 単弁12弁蓮華文（6133B）

瓦当―径16.5cm・厚3.6cm，内区―中房径3.9cm・蓮子1＋6・弁区幅3.1cm，外区―内縁幅1.5cm・珠文15・外縁幅2cm・高1.1cm，灰色，胎土細い砂含む，丸瓦部裏面―布痕あり。

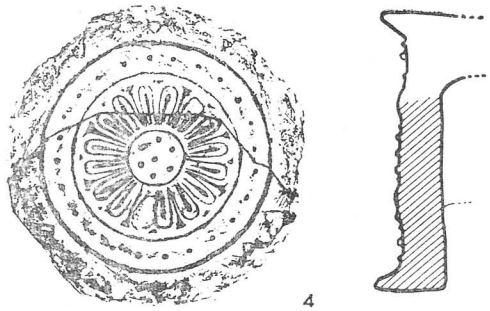


3

3. 複弁8弁蓮華文（6284C）

瓦当―径16.0cm・厚4.3cm，内区―中房径4.0cm・蓮子1＋6・弁区幅2.8cm，外区―内縁幅1.7cm・珠文24・外縁幅1.7cm・線鋸歯文16，灰黒色，胎土砂粒含む，瓦当側面―横ナデ。

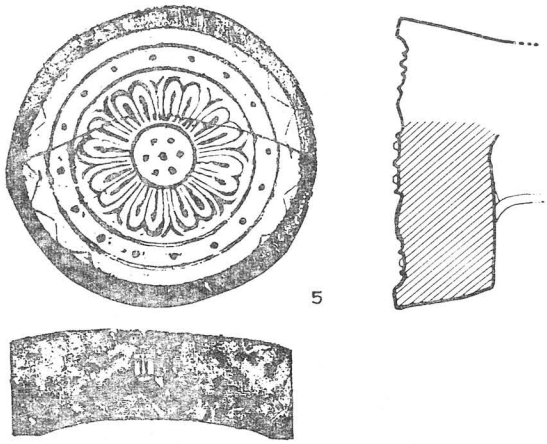
Fig. 18　軒丸瓦



4

4.　複弁８蓮華文（6285）

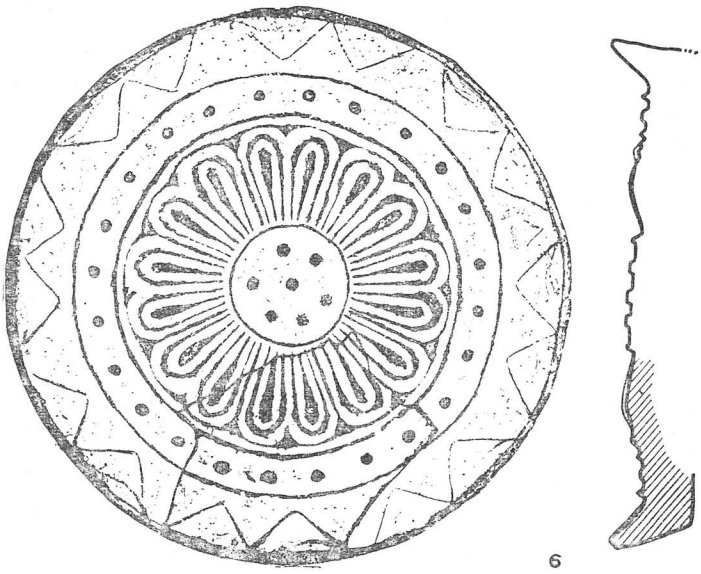
瓦当―復原径16.5cm・厚4.1cm　内区―中房径3.3cm・蓮子１＋６・弁区幅3.1cm，外区―内縁幅1.7cm・珠文23・線鋸歯文22，灰色，胎土小石・砂含む，瓦当面に笵の木目が残る。



5

5.　複弁８弁蓮華文（6308Bb）

瓦当―径16.2cm・厚5.3cm，内区―中房径3.6cm・蓮子１＋６・弁区幅3.2cm，外区―内縁幅1.3cm・珠文16・外縁幅2.2cm・高0.6cm・線鋸歯文16，灰色，胎土緻密，瓦当側面に「北」の刻印あり。

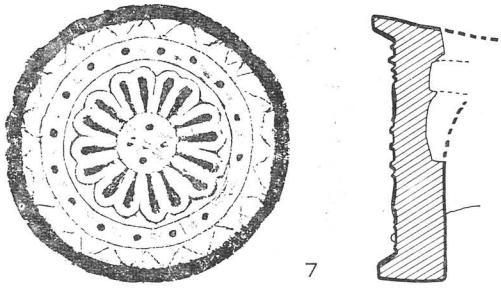


6

6.　複弁８弁蓮華文
（6304L）

瓦当―復原径30cm・厚5cm，内区―中房・蓮子とも不明，外区―内縁幅2.4cm・高2.4cm・線鋸歯文，黒灰色，胎土砂粒含む。

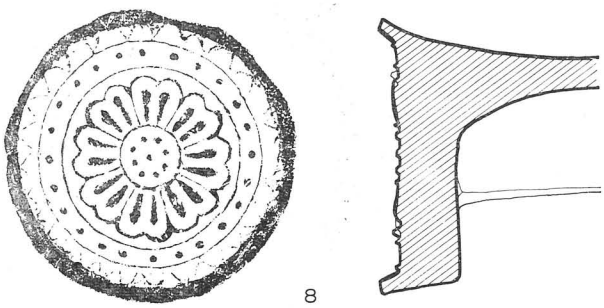
Fig. 19　軒丸瓦



7

7.　複弁８弁蓮華文（6316Ⅰ）

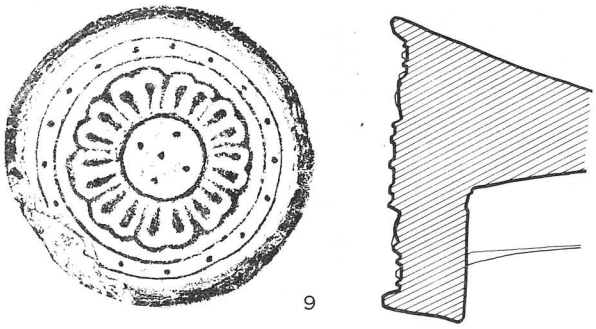
瓦当・径13.7cm，厚3.4cm，内区—中房径3.2cm・蓮子１＋４・弁区幅2.8cm，外区—内縁幅1.1cm・珠文16・外縁幅1.2cm・高0.9cm・線鋸歯文20，灰色，胎土良質



8

8.　複弁８弁蓮華文（6316B）

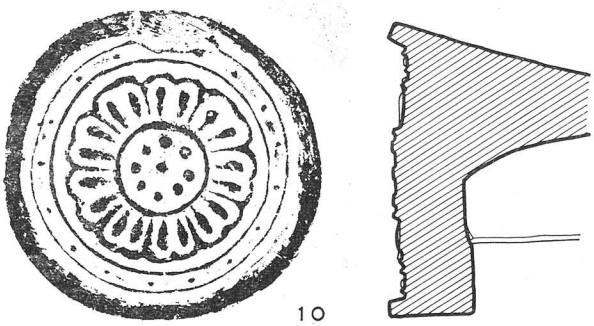
瓦当—径14.4cm・厚3.9cm，内区—中房径3.4cm・蓮子１＋８・弁区幅3.2cm，外区—内縁幅1.31cm・珠文24・外縁幅1.3cm・高1.1cm・線鋸歯文27，灰色，胎土良質，丸瓦部表面—縦方向のヘラ削り調整。



9

9.　複弁８弁蓮華文（6316Da）

瓦当—径16.0cm・厚4.7cm，内区—中房径5.1cm・蓮子１＋４・弁区幅2.7cm，外区—内縁幅1.0cm・珠文17・外縁幅1.5cm・高0.9cm・素文，灰色，胎土砂粒多く含む。

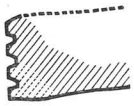


10

10.　複弁８弁蓮花文（6316Db）

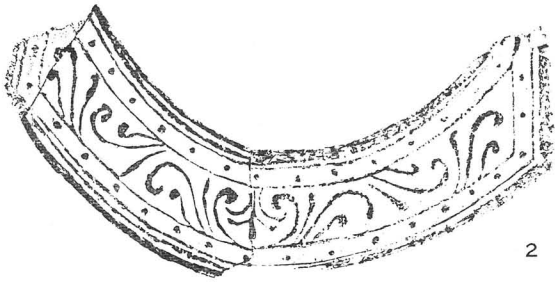
瓦当—径16.0cm・厚4.7cm，内区—中房径5.1cm・蓮子１＋８・弁区幅3.2cm，外区—内縁幅1.0cm・珠文17・外縁幅1.2cm・高1.1cm・素文，灰黒色，胎土良質，丸瓦部内面—ヘラ削り。

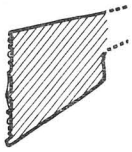
Fig. 20　軒丸瓦



1.　重郭文（6572）

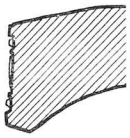
瓦当厚4.7cm，曲線顎灰黒色，胎土緻密。





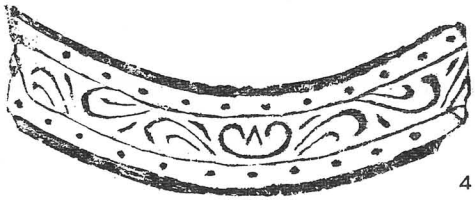
2.　均整唐草文
（6694）

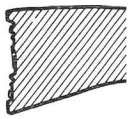
瓦当厚6.8cm，段顎一深6.0cm・高1.1cm，珠文一上外区15・下外区16・脇区2，黒灰色，胎土小石含。



3.　均整唐草文
（6721F）

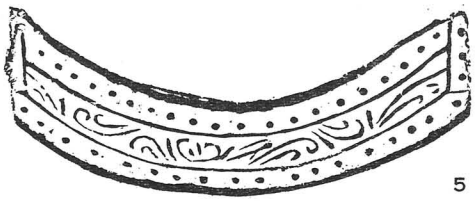
瓦当厚5.6cm，曲線顎，珠文一上外区33・下外区34，灰色，胎土小石含む。

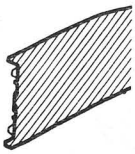




4.　均整唐草文
（6710Ab）

瓦当厚5.7cm，曲線顎，珠文一上外区13・下外区13・脇区2，全長35.4cm，凹面縦方向のヘラ削り，布痕あり，黒灰色，胎土良質。

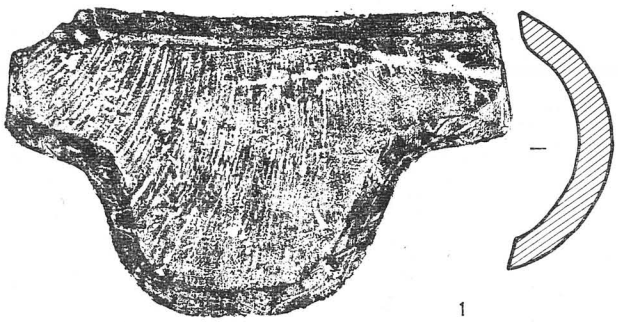




5.　均整唐草文
（6711）

瓦当厚5.2cm，曲線顎，弦幅26.7cm・下弦幅25.7cm，珠文一上外区20・下外区18・脇区3，全長39.7cm，灰黒色，胎土緻密。

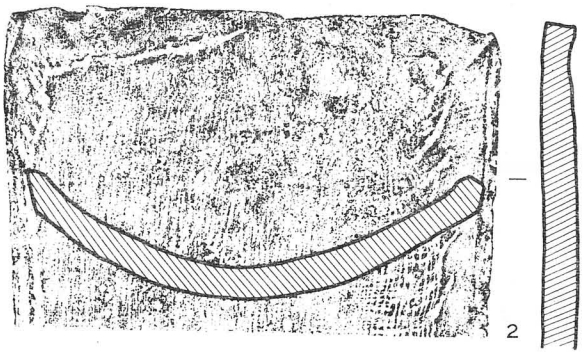
Fig. 21　軒平瓦



1

1. 面戸瓦

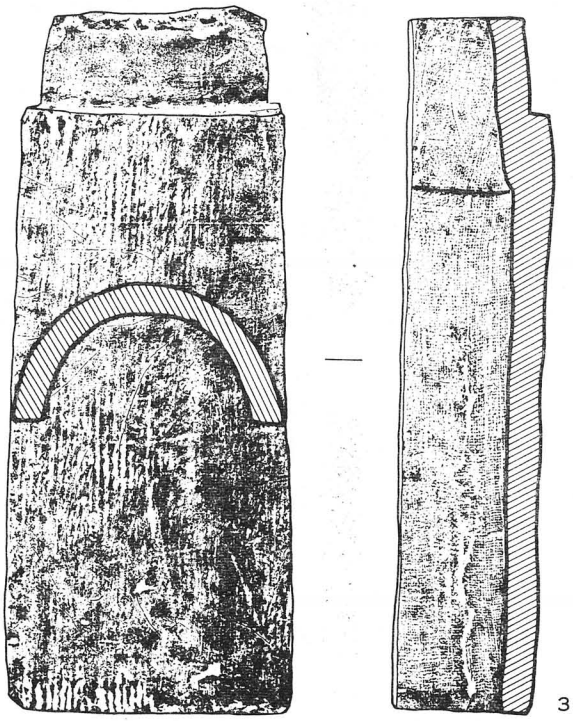
幅25.7cm・高136cm・厚1.6cm，凹面糸切り痕，凸面縦方向の刷毛目，灰色胎土砂粒含む。



2

2. 平瓦

全長35.4cm・広端幅27.8cm・狭端幅22.4cm・厚1.6cm，凸面―縦方向の縄叩き，凹面―布目圧痕，1枚作り，灰白色，胎土砂含む。



3

3. 丸瓦

全長36.7cm・幅14.1cm・厚1.7cm・玉縁長4.7cm，凸面下縦方向縄叩き，凹面布目痕，黒灰色，胎土砂小石含む。

Fig. 22　道具瓦，丸・平瓦

6. 大和郡山城天主台使用の旧礎石（PL. 9・10 Fig. 23）

郡山城は，近世は柳沢の居城として名高い。築城は，天正年間にさかのぼり，豊臣秀長，増田長盛と城主をかえながら20年かかって完成をみたといわれている。秀長百万石の時，本格的な築城がなされ，国中の石が集められている。それでも石が不足し，寺院の礎石・庭石・五輪塔・燈籠・石地蔵まで持ち出して，石垣に使用している。現在，こうした石造物が，石垣中に散見できる。このうち礎石は約50個ほどあるという。天主台の石垣には羅城門の礎石と伝えられるものを含めて14個ほどあり，ほかに基壇の化粧石がある。石材は凝灰岩（Fig. 23—3・6・8・9・10）と花崗岩製（Fig. 23—1・2・4・5・7）のものとがある。これらの礎石が伝承通り羅城門のものかどうか確定はできないが，あきらかに奈良時代のものと認められるものがあり，今回調査した分を一応紹介しておく。

礎石　（**1**・**2**・**5**）は，中心に円形の出枘をもつ円形の柱座をつくりだしたものである。（**1**）は柱座径100cm，柱座高8cm，出枘径30cm，出枘高5cmである。（**2**）は柱座径83cm，柱座高7cm，出枘径21cm，出枘高2cmである（PL. 10—2・4）。（**5**）は柱座径72cm，柱座高7cmである。（**5**）の出枘は踏み石とされていたため，表面が磨滅し，円形柱座の中央部がわずかに高くなって残っているだけである（PL. 10—1・3）。

（**3**・**4**・**6**）は円形の柱座をつくりだしたものである。（**3**・**6**）は直方体に切りだした石材の一面に柱座の仕口とみられる掘りこみが2か所ある。（**3**）は112cm×100cm×70cmで，柱座は径80cm，高さ3cmである（PL. 9—2・4）。（**6**）は120cm×96cm×74cmで，柱座は径88cm，高さ7.5cmである（PL. 9—2・6）。（**4**）は柱座をつくりだした面以外は割り面のままである。柱座は径102cm，高さ6.5cmである（PL. 10—6）。

（**7**・**8**）は柱座の二方に地覆座がある。（**7**）は柱座のある面以外は野面のままである。柱座は径70cm以上，高さ2.5cm，地覆座の幅は25cmである（PL. 10—1・5）。（**8**）は92cm×58cm×56cmの直方体で円形の柱座の半分と地覆座を一面につくりだしており，二個の石で一対となるものの片割れであろう。柱座は推定径75cm，高さ3cm，地覆座の幅は26cmである。

唐居敷（10）　100cm×70cm×52cmの直方体の石の一面に径15cm，深さ3cmの軸摺り孔と方立の穴がある。方立の部分は石碑の台座にした時，大部分を打ち欠かれている（PL. 9—5）。

基壇化粧石（9）　116cm×61cm×28cmの直方体の石材の長辺の一辺に仕口がある。葛石とみられる（PL. 9—1）。

（**1**・**2**・**4**・**9**）は天主台石垣の東面に，（**3**・**6**）は天主台石垣の東北の稜線の裾に，（**5**・**7**）は天主台登り口の東南に，（**8**）は天主台西南方約50mの石垣上端に，（**10**）は天主台上の石碑の台座となっている。（**3**・**6**）とここに紹介できなかった他の一個を加えて三個は天主台東北隅の石垣の裾にあるが，伝承では羅城門の礎石といわれている。

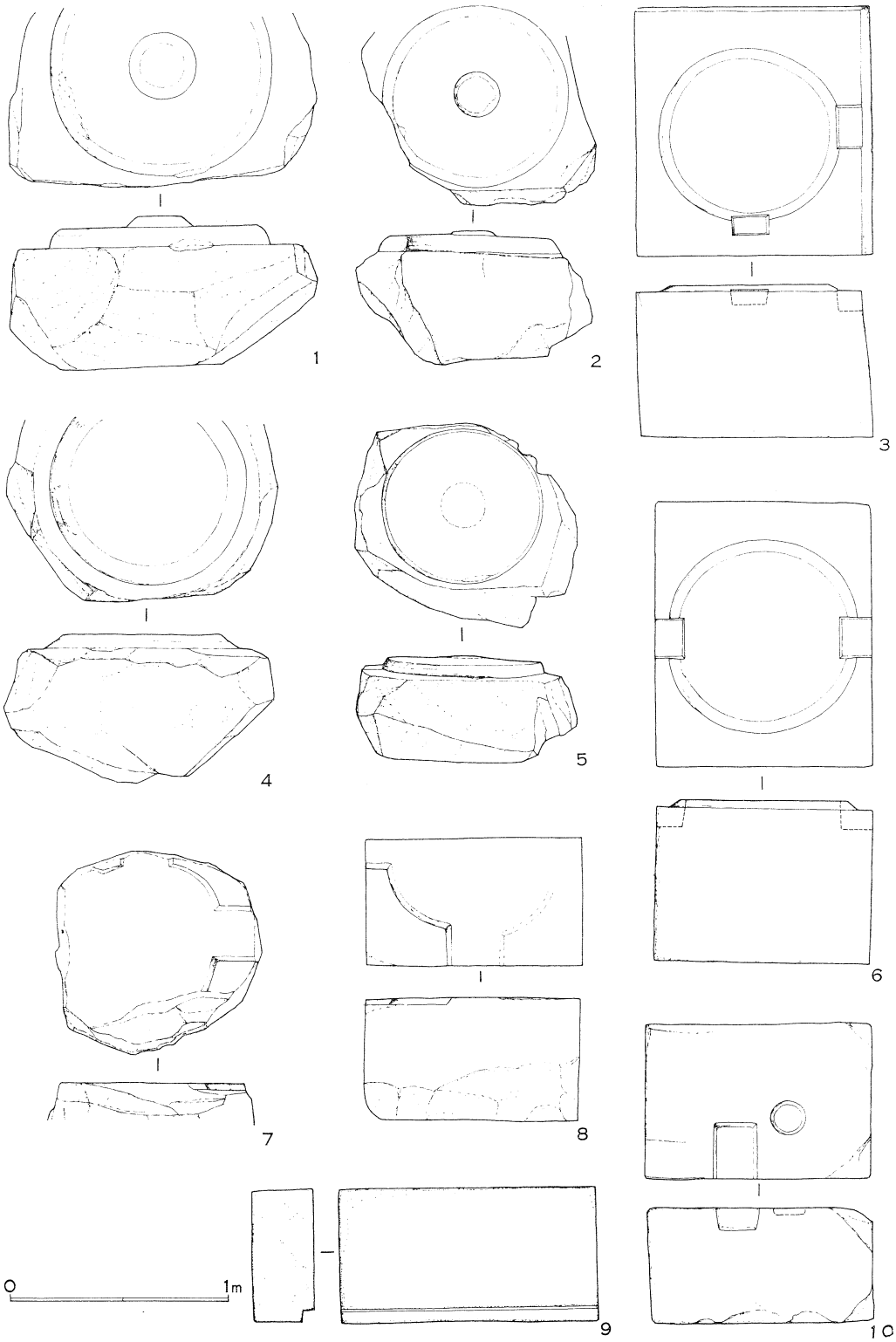


Fig. 23　大和郡山城天主台使用の旧礎石